漆黒の姫巫女、愛しの陛下

motomi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
漆黒の姫巫女、愛しの陛下

【Ｎコード】
Ｎ０７９０Ｐ

【作者名】
ｍｏｔｏｍｉ

【あらすじ】
突然異世界に召喚されてしまった美早。神に見放された王国で、姫巫女として人々を救うことに。神の声を聞き、その意思に従って王国の闇を打ち払った彼女は、役目を果たしたご褒美に「どんな望みでも可能な限り叶えよう」と王様に言われる。女嫌いの陛下に、彼女が望んだことは自らとの結婚だった――。「お前は魔女だ！悪魔だ！」「一国を救ったご褒美に、王妃になりたいと願っても罰は当たらないと思いますよ？」　※以前上げた短編の連載ｖｅｒ．です。１，２話はそのまま。３話は少しだけ改稿してあります。

01

それはおとぎ話。

世界が闇に覆われて、長き繁栄を誇っていた王国は滅亡へと歩みを進める。神々からも見放され、次々と襲い来る天災や疫病に、多くの民の命が奪われる。

刻一刻と迫り来る滅びを、ただ待ち続けるしかなかった人々の前に、ある時一筋の光が差し込む。漆黒の瞳に漆黒の髪、夜を纏い、闇を抱く少女は、異世界より舞い降りし姫巫女であった。神の声を聞き、神の言葉を解する彼女は、人々を救うべく、神の意思に従い王国の闇を打ち払う。

再び取り戻された平和な時と神々の加護。

国を救った姫巫女は、大勢の国民に感謝され、そして国王から直々に尋ねられる。

「巫女の望むものは何か。例えどのようなことであっても、私に可能な限りそれを叶えよう」

国民を代表して告げた王の言葉に、姫巫女はそっと美しい微笑を浮かべた。

※※※※

「お前は恐ろしい女だ。魔女だ、悪魔だ、大魔王だ」

国中で巫女だ、聖女だと讃えられる少女に、男は蒼白な顔で正反対の言葉を吐いた。白銀の髪に金色の瞳、そして神秘的な色合いにふさわしくこの上なく美しい端正な容姿。この国で最も貴いとされるお方、国王陛下その人である。正式な儀礼等の際に着用する白地

に金刺繍の衣装に身を包み、本来ならただそこに立っているだけで惚れ惚れするだろう外見を持つ彼。
しかしながら今現在、部屋の隅に置かれたソファに身を隠すようにして縮こまるという奇怪な行動をとっているため、全てが台無しになっている。
（……これが世に賢帝と謳われる国王の姿か）
部屋にいる侍女たちはきっともれなくそう呆れたことだろう。けれど、そう思ったことなど微塵も感じさせずに仕事を続ける彼女達に感嘆を覚えながら、陛下に魔女だと言わしめた少女はくるりと身を翻し、鏡を覗き込んだ。

「ふむ、思っていたよりマシかしら」

鏡面に映るは白い衣装に身を包んだ自分。背が高くボン・キュ・ボンのナイスバディが多いこの国の衣装は、寸胴な日本人体系の少女には明らかに似合わないものが多い。しかし、現在は礼装等にしか用いられないという旧式のこの衣装は、つくりが着物に似ており、ドレスよりは違和感なく着ることができている。

「んー、ヘイカとお揃いっていうのが気に入らないけど、まあ我慢しましょう」

他の者が言ったら不敬となるだろう言葉を何のためらいもなく吐き、少女は未だソファ越しに自分を睨むヘイカに向き直った。そのヘイカと模様違いの金刺繍が施された衣装の裾が揺れる。真っ白な衣装は彼女の漆黒の瞳と髪を際立たせ、ヘイカとはまた違った感じの神秘的な雰囲気を醸し出している。

「さあ、国民も待ちかねていることですし、そろそろ参りましょう、ヘイカ」

差し出した手が取られる気配はない。意固地な子どものように、陛下はじっとその場を動こうとしない。

「今更約束を反故になさるおつもりですか？」

にっこり微笑みながら己をなじる少女の言葉に、ようやく美貌の陛下は折れ、少女の手を取っ――否、訂正。少女の小指をそっと握った。それから、今にも逃げ出したいという気持ちを振り絞って立ち上がり、できる限りの距離をとって少女と共にテラスへと続く方向に歩み始めた。

それと共に、今までも聞こえていた歓声が更に大きさを増す。本日に限り特別に開け放たれた城内の広場では、国民達が今か今かと国王と少女――漆黒の姫巫女が姿を現すのを待ち続けていた。

「陛下、そのように奥方と距離を置いていては国民が不仲を疑います。もうすこし寄り添って。あと表情は笑顔でお願いします」

出口付近に立っていた宰相が脂汗を流す陛下を嗜める。不仲を疑うまでもなく不仲なのだが、今それを言う余裕は陛下にはない。あとで覚えていろよ。じとり宰相を睨めつけて、国王は嫌々ながら巫女の腰に手を回した。

「……そこまで嫌がられると傷つくんですけど」

「黙れ、諸悪の根源め」

見上げた顔はテラスに出た瞬間、今にも死にそうな瀕死顔からギリギリ作り笑いに見えないこともない複雑な笑顔に変わった。

二人が降り立ったテラスから広場まで、結構な距離がある。ましてこちらから国民を見下ろすように立っているため、よっぽど視力

が良くない限りこの嫌そうな顔をした陛下の様子は分からないだろう。
少女も陛下に倣い、しかしこちらはどこからどうみても満面の笑みにみえる表情をつくって国民たちに手を振った。
寄り添う二人を祝福するように、「おめでとうございます」「陛下と巫女様に祝福あれ！」といった言葉が聞こえてくる。
――王国暦四八二年、紅の月。グランディール王国、国王アルヴィフリート＝ディルレイ＝ユラ＝グランディールと伝説の姫巫女佐藤美早（サトウミハヤ）は国民に祝福される中、婚姻を結んだ。
「は、はは。まさか“望むもの”と尋ね、王妃の座を要求されるとは思いもしなかったぞ」
ついにどこかおかしくなったのか、陛下は乾いた笑みを漏らしてそう呟いた。
「イヤだなあ、ヘイカ。伝説の巫女が王様と結婚なんて結末、物語の王道中の王道じゃないですか。誰だって予想できるハッピーエンドですよ」
「どこがハッピーだ、どこが。お前はただ王妃という地位に就きたかっただけだろう」
「ひどい言い様ですね。どうしてそんな風に思われるんです」
「どうしてもなにも、お前は私のことを嫌っているだろう」
じっと見下ろされ、美早はこれが新婚、しかもたった今式を挙げたばかりの夫婦がする会話なのかと苦笑を漏らした。
「嫌っているのはヘイカのほうじゃないですか」
「私が嫌いなのは女全般だ」

お前限定じゃない。威張るようにそう言われ、美早はまたも苦笑する。

女嫌いの国王陛下。詳しいことは知らないが、幼少時代に女性がらみで嫌な経験をしたらしく、美貌の陛下は女性には好かれるが本人は半径一メートル以上に女性が近づくと悲鳴を上げるほど女が苦手だった。当然のことながら体に触れるのも駄目で、本来ならばこうして美早の腰に手を回し、寄り添い笑いあうなどもってのほかである。

だがしかし、国王自ら言った「望むもの、何でも叶えよう」宣言のせいで拒むものも拒みきれず、今現在逃げ出したくなるのを堪え必死で苦行に耐えていた。自業自得といえばその通りだが、アルヴィフリートはあの時、まさか美早が王妃の座を要求してくるとは夢にも思っていなかったのだ。

「“王妃様”なんて全ての女性の夢じゃないですか。一国を救うなんて大役を終えたご褒美に、優雅で豪華な余生を送りたいと思っても罰は当たらないと思いますけど」

「……お前、そんな理由で」

私と結婚したのか。そう言おうとした言葉は、しかし最後まで紡がれることなく飲み込まれた。横にいた美早が突然アルヴィフリートの腕を掴み自分の方へと引き寄せたのだ。

「！？」

動揺するアルヴィフリート。美早は美しい微笑みのまま夫を見上げた。

「ほらほら、ヘイカ。皆さん折角集まって下さったのですから、国

民の方々にもう少し仲の良いところをお見せしなくては」
「は！？　何を言っているんだ、お前。これ以上私になにをしろと言う！」

寄り添って、国民に手を振る。それだけで充分“仲がいい夫婦”じゃないか。
腰に手を添えるだけで限界の限界だというのに、この上美早は女嫌いの夫に極刑を言い渡す。

「仲のいい夫婦といったら口づけに決まっているでしょう」
「！？」

その瞬間、アルヴィフリートは妻の姿に悪魔を見た。冒頭、自分が吐いた言葉は間違っていなかったのだ。美早は悪魔だ。女嫌いの自分に結婚を迫った挙句、国民の前で口づけをしろという。
顔面蒼白の国王に、追い打ちをかけるように国民たちが口づけコールをし始めた。

「ほら、皆も望んでいます」
「くっ……」

自分は今日、死ぬかもしれない。いや、今日死なずとも、近いうち絶対死ぬ。死因は女性嫌い。今までそういった話は聞かないが、今だって気を失ってしまいそうなのだ。
焦れる国民達の声が大きくなる。目の前の妻は瞳を閉じ、うっとりと夫からの口づけを待ち続けていた。
ああ、神様――
アルヴィフリートは天を仰ぎ、決死の覚悟でそっとその身をかがめた。

02

純白のドレスに、可愛らしい花のブーケ。海沿いに建てられた西洋式の教会で、親しい人たちに囲まれながらこの世で一番愛しい人と一生の愛を誓う。二人手に手を取り合って、これから先の人生を互いに支えあって生きていくのだと。病める時も健やかなる時も、どんなときもずっと一緒にいるのだと。

「本当に、素敵なお式でしたわ」

乳白色の湯船につかり、湯に浮かべられた桃色の花弁を見るともなしに眺めていた美早（ミハヤ）に、傍で待機していた侍女ナティーシャから声がかけられた。

他人に裸を見られるなど最初はもっての外であったが、今では多少の気恥ずかしさは残しつつも、ある程度慣れてきた。湯浴みの世話をする侍女を特別親しい者に限り、世話をしてもらう際も一人のみとしているため、大分精神的負担が軽減されたのだ。世話をする側の侍女には逆に負担を強いることになっているのかもしれないが、そもそも美早は風呂ぐらい一人で入れるのであって、その辺りは両者が妥協することでなんとか落ち着いた。

「素敵な式、ねえ」

侍女の言葉を鸚鵡返しに呟いて、美早はふっと自嘲的な笑みを洩らす。

「そういえば、ナティーシャは今日の昼間は休みをとって広場からお披露目を見ていたのだっけ」

「はい。本当ならばミハヤ様のお傍近くに仕え、婚礼のお支度を手伝いたかったのですが、残念ながらユーディリアたちに役目を取られてしまったので」

ユーディリアとはナティーシャと同じく美早の侍女をしている女性の一人だ。主と国王の婚礼に際し、誰がその支度を手伝うか、侍

女たちの間でひそかに争奪戦が行なわれたらしい。主人の晴れ舞台と、美貌の国王を間近で見ることができるというまたとない機会に、侍女たちはなんとしてでもその役目を自分がしたいと考えたのだ。

「私としては全員手伝ってくれても良かったんだけどね」

というか最初はそのつもりだった。美早付きの女官はそれほど多くない。入浴時に限らず、庶民生まれの美早は基本一人でなんでもできるし、毎日の生活を送る上で常に傍に誰かがいるというのは逆に気が休まらなかった。そのため、この世界に来た当初顔も覚えきれないほどいた侍女は、美早が気に入った十何人かに減らされ、今は顔と名前が一致しある程度世間話が可能な気の置けない侍女だけ傍についている。

その侍女たち全員を集めたとして、婚礼の支度に特に支障が出るほどの大人数になるわけでもなく、むしろ王妃となる者の世話をするのだからこれぐらいは当然という適度な人数が揃っただろう。だが。

「陛下が人数を指定なさったのですから、仕方がありませんわ」

ナティーシャが残念そうに言葉を紡いだ。

そう、本日付で美早の夫となった国王陛下直々に、式の最中美早の傍に侍らす侍女の数を指定してきたのだ。なんて無粋な。傲慢な要求にやや腹が立ったが、女性嫌いの陛下は頑としてそれを通した。ゆえに美早は衣装等の支度に最低限必要な人数だけを連れて式に臨むこととなり、公平に人選が行なわれた結果（どうやらくじ引きで決めたらしい）、残念ながらナティーシャはその役目から漏れてしまったのである。

「でも、お二人の口づけの場面を近くで拝見することができなかったのは、かなり残念ですわ」

心の底から悔しそうに言う侍女に、美早は思わず噴出した。口づけをした時の、あのアルヴィフリートの顔。思い出すだけで涙が出るほど笑いが込み上げてくる。

「どうなさいました？」

「いや、なんでも。というか、そんなに他人のラブシーンなんか見たいものかね」
「当然です！　なんといっても、我らが国王陛下と国を救った姫巫女様とのキスシーンですもの。御伽噺にある物語の様で、私うっとりしてしまいましたわ」
うっとり、か……。
ナティーシャは両手を握り合わせて夢見る少女のごとく頬を赤く染めた。
確かに、内情を知らぬ者から見れば自分達夫婦はそのように見えるのかもしれない。だが、実際はそんな甘い関係ではない。彼女の夢を壊すのは少々忍びない気もするけれど、どうせ後から他の侍女にでも聞かされるだろうから、言っておく。
「してないよ、口づけ」
「……は？」
大きな茶色の瞳を点にして、ナティーシャは固まった。驚いていても、湯から上がった美早にタオルを手渡すのを忘れないあたり流石ベテラン侍女だとおもう（彼女は十一の時から城で働いている）。
「し、してないってどういうことですか」
「そのままの意味だよー。あ、でも、ちょっと違うかな？　口づけはしたけど、唇と唇が触れたわけじゃなかったの」
「と、仰いますと？」
「ヘイカの唇が触れたのは、ここ」
言って美早は自分の唇から少しずれた位置を指差した。
あの時、できたてほやほやの新妻と期待を満面に滲ませた国民とに死刑宣告―もとい妻との接吻を迫られた陛下は、最後の最後で唇同士の接触をぎりぎり避けた。離れたところにいる国民からは口づけを交わしたように見えるよう、しかし実際には触れ合わないすれすれの場所に口づけを落としたのだ。それはあの瞬間、彼の頭に色々とよぎった葛藤の末の妥協案なのだろう。それでも本人は大ダメージを受けたらしく、テラスから室内に戻った途端倒れこみ、控え

ていた従者達（♂）に運ばれたわけだが。
「今頃自室でうなされていることでしょうよ」
「……」
夫が瀕死状態（精神的に）というのに、至極嬉しそうに語る美早に、我が主ながら、ナティーシャは夫となった国王陛下へ同情の念を禁じえなかった。
「ミハヤ様って、一体陛下のことをどうお思いなのですか？」
「ん？　ふふふ」
聞くも、美早は笑って答えようとしない。なんだかこれでは本格的に陛下が哀れである。
「でも、ただ口づけをしただけで気を失われたのでは、先が思いやられますわね。特に今宵は……」
途中で言葉を切ったナティーシャに、依然微笑を浮かべたままの美早が心の中でそれを引き継いだ。そう、今宵は式を挙げた夫婦が皆共通に通るだろう、一大イベントが待っている。
（新婚初夜、がね）

※※※※

潤んだ夜色の瞳がこちらを見上げている。瞳と同じ漆黒の髪が白い輪郭を縁取り、彼女の色白な肌を一層際立たせた。美人、というほどではないが愛嬌はある。幼く見えるが一応成人しており、二十七歳の己より五つ下の二十二歳だという。身分的にも年齢的にも申し分のない、今日より自分の妻となった女、ミハヤ＝サトウ。異世界より召喚され、この国の危機を救った伝説の姫巫女でもある彼女に、アルヴィフリートが思うことはただ一つ。
――キモチワルイ。
彼女の何が悪いというわけではない。むしろ、原因は自分にあった。幼少時よりのトラウマから、女という生き物がどうしても好きになれないのだ。というか、極力近づきたくない生き物である。

男を包み込むための柔らかく丸みを帯びた体も、ふっくらと艶めく赤い唇も、誘うような甘い匂いも甲高い声も。目に入れた瞬間逃げ出したい衝動に駆られるほど、キモチワルイ。
妻の腰にそっとまわした左手が震えていた。照れや恥じらいからではない、恐怖心からだ。全身に脂汗が滲み、心臓が激しく警戒音を鳴らしている。国民の前であるというのと、約束を守るという義務感からなんとか笑みを作り国民に手を振るが、内実極限状態にあった。しかし、そんなアルヴィフリートを年下の新妻は更に奈落へと突き落とそうとした。
細くたおやかな腕が彼の身体を引き寄せる。広場のざわめきが一層増し、薄紅色の妻の唇がそっと近づいてきた。
『さあヘイカ、口づけを』
「うわあああああああああ！」
アルヴィフリートは声を上げガバリと身を起こした。
目に映るは絹でできた寝具と、天鵞絨の天蓋。落ち着いた色合いで統一された家具たちは整然とこの部屋の主を見守っていた。いつもの、見慣れた寝室の風景だ。
「ゆ、夢か……」
ふう、と息をついたとき、傍らに立つ男の存在に気づいた。
緩く波うつピンクベージュの髪と、淡い空色の瞳を持つ青年は、突然大声を上げ飛び起きた主に、驚きの表情を浮かべている。グランディール王国、若き宰相、クレイ＝シーフィリア＝ルーデンス。
「大丈夫ですか」
「あ、ああ。なんとか」
返事をしつつ、未だ悪夢の余韻覚めやらぬ様子で、彼は自らの唇に手の甲を押し付けるようにして乱暴に拭った。
――嫌な夢だ。
いや、夢でなく現実なのだが、己の平静を保つためアルヴィフリートは記憶を抹消することに決めたらしい。
（私は大丈夫、私は大丈夫、私は大丈夫……）

ぶつぶつと自分に言い聞かせるよう繰り返す彼に、アルヴィフリートの右腕である宰相は大袈裟によろめき片手で顔を覆った。そして。

「よく我慢なさいましたね、陛下」

陛下の内情（おんなぎらい）を知る彼は、主を襲った悲劇を思い、涙声で身体を震わせた。悲壮感を纏い同情してくる臣下に、しかしアルヴィフリートは半眼で彼を睨みつける。

「白々しい態度はよせ、クレイ」

言うと、一寸の間を置いてクレイはぶはっと盛大に噴出した。基本オーバーリアクションなのだ。静寂を纏っていた室内に、一変してクレイの笑い声が響き渡った。涙を堪えているかのように見えたのは、実は笑いを堪えての震えだったらしい。クレイは腹を抱えて笑い転げた。

「お前の辞書に不敬という言葉はないのか」

「だっ……ふ、あはははは、……だって、陛下、っく、笑っても良いとおっしゃったではありませんか……っく、ははは」

「そんなこと言っておらんわ」

白々しい態度はよせと言っただけで、主人を笑うことを許可する言葉など一言たりとも吐いてはいない。しかし一旦噴出した笑いは止まる術を知らず、その後クレイは別の意味で涙が出るほど一頻り笑い倒した。

宰相であると同時に国王の乳兄弟でもある彼は、普段は臣下然とした態度を装ってはいるが、今のように他者の目がない時は、一瞬のうちに化けの皮がはがれ本当の顔が表に現れる。日頃何匹の猫を被っているのかと呆れるほど、その態度はくだけたものへと変わる。

「はあ、おかしかった」

腹筋の使いすぎで痛くなった腹をさすりながら、クレイは顔中に不機嫌さを滲ませる主へと向き直った。

「そんなに滑稽か」

「ええ、向こう一ヶ月このネタで笑い通せる位には。ミハヤ様に口

づけたときの陛下の顔といったら、もう――」
「クレイ！」
「鏡に映してご自身にも見せて差し上げたかったです。……オホン、さて、冗談はここまでにして。陛下にはそろそろお支度をしていただかねばならないのですが」
一体どこからどこまでが冗談だったのか、問い質してみたい気もするが、それより気になる言葉を耳にして。
「支度？」
アルヴィフリートは首を傾げた。
「一体何の支度をしろというのだ」
窓の外を見やれば外は既に薄暗く、夜の気配がする。強い倦怠感もないため、眠りに落ちて――正確には気絶して――からそれほど時間は経っていないのだろう。ということは、今日はまだ婚礼を挙げたその日にあたるはずだ。挙式の日ぐらいのんびり過ごせと言っていたのは臣下達だったが、何か急な案件でも生じたのだろうか。
すぐに起き上がり、執務室へ向かおうとすると、そちらではないとクレイが手を挙げ制止した。
「どこへ行かれます。仕事熱心なのも結構ですが、陛下が今向かうべき場所は執務室以外にもあるではないですか」
「は？」
きょとんとして見返せば、空色の瞳はにたりと細められ、嫌な笑みが口元に浮かんでいた。
「本日、陛下はミハヤ様と婚姻を結ばれましたわけですが」
「ああ、」
アルヴィフリートにとってはすでに抹消した記憶だったが、やはりそうはいかないらしい。
「式を挙げたばかりの、いわば新婚でいらっしゃる二人が式を挙げた夜にすることといえば、何か思い浮かぶことはございませんか？」
「何をいうつもりだ、クレイ」
嫌な予感がして一歩下がる。心臓が早鐘を打ち、続く言葉がよか

らぬものだと五月蝿いくらい報せていた。この感じ、ぞっと背筋が冷たくなる感覚を、遠くはない昔味わった気がする。

「新婚初夜でございます、陛下。すでに後宮にて奥方がお待ちですよ」

ああ、そうだ。今日、ミハヤと一緒に国民の前に立ったときの感覚とひどく似ているのだ。

その日二人目の悪魔がそこにいた。

03

初夜を待つ妻というものは、こんなにもわくわくと心を躍らせているものだろうか。

時刻はいつもなら就寝する時間を少し過ぎたところ。全くといっていいほど眠気の襲ってこない身体をそわそわと動かしながら、美早は一人夫の訪れを待っていた。愛しい人の来訪を待つ愛らしい妻。わくわくもそわそわも、きっと的外れではないのだろうが、しかし彼女の胸をときめかせるのはそういった、世間一般の女性が抱く微笑ましい感情とは全く次元が違っていた。

甘酸っぱい恋心ではもちろんないし、色欲や情欲といった官能的なものでもない。愛情など勿論論外で。

今、彼女の心を満たすのは、まるで小さな子どもが悪戯をする時のような、親に見つからないよう拙い(つたな)ながら真剣に計画を練って実行に移す時のような、そういった恋や愛とはかけ離れた感情だった。

(もうすぐ、ヘイカがここにやってくる)

昼間、彼女の頬に口づけをしただけで卒倒してしまった夫。周囲の者に背を押され嫌々ながらも夫婦の営みをしに自分のもとへやってくる彼の姿を思い浮かべ、美早はにっと口の端が上がるのを感じた。極度の女嫌いの陛下が自分を抱けるとは到底思えない。だからこうしてわくわくと訪れを待っていられるのだけど、上に大が三つはつくほど苦手な女を目の前に、あの美しい陛下がどのような反応をみせるのだろう。

(好きな子をいじめる小学生の気持ちってこんな感じかしら)

これから起こるめくるめく夜に思いを馳せたその時、側に控えていたナティーシャが立ち上がり、陛下の来訪を告げた。

「……」

憮然とした顔で室内に入ってきたその人は、長椅子から立ち上が

り礼をした美早の顔を見て、少しばかり落胆の表情を浮かべた。
「寝ていなくて、残念に思いましたか？」
様子から察するに、自らがおとないの支度に時間をかけている間に、美早が眠ってしまえば相手をせずに済むとでも思っていたのだろう。だから妙に遅かったのか。
暗に指摘すると、アルヴィフリートは図星とばかりに目をそらした。
――本当に分かりやすい方。こんなにもいろんな意味で楽しいイベントを前にして、眠れるわけがないじゃない。
「確かに、朝から緊張の連続で些か疲れてはおりますけど」
「ならば、」
「折角ヘイカがいらっしゃった喜びで、疲れなど吹っ飛んでしまいました！　誠心誠意、真心込めておもてなしいたしますね」
逃がしませんよという意味を込め、美しく微笑む。それから依然入り口付近から動こうとしない夫の体へと手を伸ばした。
「なにをする！」
掴まえる前に、その身体は後ろに身を引き逃げて行ってしまう。
「なにをするもなにも」
ナニするんですよ、ヘイカ。
流石にこれは口に出さずに心で呟いて、逃げた身体を追いかけようと美早は再度夫に手を伸ばした。が、アルヴィフリートは国民という衆目もなくなった今、躊躇うこともなく室内を逃げ回る。昼間のときとは違い、今現在の彼には“仲のよい夫婦”を演じなければならない理由など一切ないのだった。
王妃と一晩、閨を共にした。その事実さえあれば、実際はなにをしていたとて――つまり、なにもしなかったとしても、他者には分からない。ふと、そのことに気がついてしまったアルヴィフリートは、今宵一晩、どんなに無様であろうと、己の妻から逃げ回ることに決めたのであった。
こちらに来て以来、美早は巫女の仕事をしつつも、基本的には王

宮で大人しく暮らしていた。執務の合間とはいえ常に鍛錬を欠かさないアルヴィフリートと、追いかけっこをしてどちらが勝つかなど、考えずとも明らかだ。

勝った――！

勝利を予感したアルヴィフリートは、鬼の首を取ったかのような気分で美早を振り返った。すると。

「！？」

自分を追いかけていたはずの美早は、いつの間にか寝台の傍に身を縮め、俯き加減でしゃがみこんでいる。

「お、おい……」

一体何が起こったのか。尋常ではない彼女の様子に、もしや気分でも悪くなったのかとアルヴィフリートは慌てて美早に駆け寄った。本来なら女など見るのも触るのも近寄るのも、もってのほか――なのだが、病人を前にしてそんなこと言っている場合じゃない。

「どうした、気分が悪いのか」

「少し、めまいが……」

先ほどは冗談めかして言っていたが、やはり疲労が溜まっていたのだろう。苦しそうに眉間に皺を寄せる美早は、心なしか吐く息も荒く、その顔は青ざめて見えた。

今日は朝早くから式の準備をし、その後はほとんど休みなしに立ち通しでスケジュールをこなした。貴族や王族の者が見守る中、盛大で荘厳な式を挙げ、昼食を取るのも貴族を交え挨拶を兼ねての食事会において。その後は各大臣達の元を回り顔合わせをし、最後は国民への結婚披露だ。特に、テラスでの御披露目は、衆目に晒されることに慣れていない美早にとって、肉体的疲労だけでなく精神的にも大きな負担となったことだろう。

ぎゅっと身体を抱いて縮こまる美早を、アルヴィフリートはそっと抱き起こし、新婚用に整えられた寝台の上へ横たえた。

「大丈夫か。誰か侍女を呼んだほうが……」

気遣う夫の手を、美早はそっと握り締める。

「大丈夫、です。少し横になっていれば治りますから」
「そうか？」
「ええ、だから」
そこで言葉を切って、美早はぐい、と握り締める手に力を入れた。
「私の傍に、いて下さると嬉しいのですが」
ニタリと笑う美早の表情に、アルヴィフリートは違和感を覚えた。いや表情もそうだが、その肩越しに見える天井に、ひどく違和感が――そうだ、見下ろしていたはずの美早の顔を、どうして見上げているのだろう。背には肌触りの良いシーツの感触。
ということは、自分は。
押し倒されている――！
「なななななっ！！！」
「案外簡単にいくものですね。もう少し手こずると思ったのですが、ヘイカが間抜…病人を放っておけない誠実なお方で助かりました」
「今、間抜けと言おうとしただろう！」
「いえ、そんな」
滅相もない、と美早は肩をすくめてみせる。動揺している間にすばやく両腕を拘束され、どこから取り出したのだか、気づくと両手は頭の上で太く頑丈な縄のようなもので固定されていた。
「お前、一体いつのまにこんなものを！」
アルヴィフリートは、うらめしげに妻の顔を見つめる。
「な、なにをするつもりだ」
「ですから、ナ――」
「冗談はいい！」
声を張り上げるアルヴィフリートに、美早はスススス、と彼の身体に指を滑らせる。
「冗談ではありません。式を挙げた夫婦がすることなど、文字通り夫婦の営みしかないじゃありませんか」
「わー！　馬鹿、何処を触っている！」
（受け……）

一瞬はしたない言葉が浮かんだが、言葉にはせずほくそ笑む。
見た目ややこしそうな衣装は、腰のところで結んだ帯を解くことで呆気なく前をはだけさせた。
「あら、意外と厚いですね、胸板。着やせするタイプ？」
「変態！　ち、痴女かお前は！」
「愛すべき妻になんてこというんですか」
それに夫婦間ですることをしているのだから、痴女もなにもない。仮にも愛を誓い合った仲なのだ。それも、大勢の国民の前で、キスまで――頬にだが――してみせた。これからの人生を共に歩むパートナーとなった二人には、キスだってそれ以上だって許されている。それこそ、裸を見せ合ったり（一方的に美早が脱がしているが）、素肌を思う存分撫でくり回したり（やはり美早が以下略）、もっと過激に入れたり出したりだって自由自在である。
勿論、当の美早に本番をする気はこれっぽちもないのだが、あまりにも陛下が大げさに慌てるので、段々とタガが外れて楽しくなってきた。
二人分の重みを乗せたベッドは、高級なだけあってきしりとも言わずにそれを受け入れる。侍女たちが念入りにセットした真っ白なシーツの上に、アルヴィフリートの美しい白銀の髪が散らばった。半分涙目になりながらこちらを見上げる瞳は金の色。暴れたせいか息が荒く、白い頬は微かに朱に染まっていた。
「い、色っぽいですね、ヘイカ」
「黙れえええええ！」
頭一つ分大きな身体を平然と組み敷く妻のすっ呆けた言い様に、夫は心底嫌そうに声を上げた。
「うふふ」
美早はそれを、満足そうに見下ろす。
「やぁめぇろぉー！」
腰の少し上にまたがって上半身を好き勝手いじくりまわるその手を、どうにか止めようともがくが、前述したように両腕を拘束され

てしまって思うように動けない。
「もしかして陛下は、致す前にはきちんとキスしてから始める派ですか？　昼間、式のときにも結局しませんでしたし、とりあえず今改めてしておくのもいいかもしれませんねぇ」
身をかがめた美早は、そう言ってアルヴィフリートの顔の横に両手をついた。
苦悶に満ちた表情と、額に浮かんだ汗。ぎゅっと寄せられた眉がなんとも艶っぽく、これがまたS心をくすぐるのだ。
（別に私Sじゃぁないけど）
誰にともなく付け足して、ゆっくりと夫の唇に顔を寄せた。
「ヘイカ……」
唇が触れ合うまで数センチ。あとは目を閉じ、唇を合わせるだけとなったそのとき、
「――ぃ」
アルヴィフリートが何かを小さく呟いた。
「え、はい？　なんですか？」
聞こえなかった、と耳を寄せると、本当に切実そうな声で言う。
「キモチワルイ……」
その顔は今にも死にそうなほど色を失っていて。
――やりすぎた。
すぐさま、美早は我に返った。それから、さっと身を引いて夫の腕を拘束していた縄を解いてやる。戸惑う彼が面白くて、つい悪乗りしてしまった。
「ヘイカ、ヘイカ、大丈夫ですか？」
顔を覗き込むが、拒むようにそらされてしまう。
「誰か、呼んできましょうか」
「……いい」
ぎゅっと両手で身体を抱くようにして身を縮めるアルヴィフリートに、自業自得とはいえ美早は罪悪感を覚えた。
アルヴィフリートが女嫌いなことは充分に承知していた。承知し

た上での行動だった。随分意地の悪い性格だとは思うけれど、でも、彼が自分にしたことへの、ほんの少しの意趣返しのつもりで、軽い悪戯感覚だったのだ。けれど、まさかそれ（女嫌い）がこんなに深刻なことだなんて、思いもしなかった。

ベッドから下り、美早は傍らのテーブルにあった水差しから、コップ一杯分の水を器に入れる。

「ヘイカ、お水」

「……」

「ここ、置いておきますから、よかったら飲んでください」

気を落ち着けて欲しくて、ただそれだけ言うと、ベッド――夫の傍から離れた。

04

名前を呼ぶ、優しい声。ゆるくウェーブのかかった髪は艶やかなプラチナブロンドで、彼を見下ろす瞳は深い海の色をしている。そっと抱き寄せられる腕は温かく、細く頼りなげなそれにまるで守られているかのような錯覚を覚えた。

――アルヴィフリート

美しい人。美しくも儚い、可哀想な人。

彼女はいつも優しげな笑みを浮かべて彼を見つめていたけれど、振り返ってみれば、それらは悲しみを堪え、泣くのを堪えているような表情だったようにも思う。

――アル、アルヴィフリート、大丈夫、大丈夫よ。なにも怖がることなんかないから

一瞬前まで彼の身体を愛おしそうに抱きしめていた彼女の腕は、いつのまにか彼の首に回され、驚くほどの力でそれを絞めていた。

――大丈夫、なにも心配いらないわ。私も、私もすぐに一緒にいくからね

大丈夫、大丈夫よ。幼子に言い聞かせるように言う彼女の声を聞きながら、徐々に霞んでいく視界に映ったのは、この世のなによりも恐ろしい“女”の顔だった。

※※※※

白い陽光がカーテンの隙間から差し込み、薄暗い部屋の中を仄かに照らし出す、朝。チチ、という小鳥のさえずりとともに微かな羽音が聞こえてきて、アルヴィフリートは目を覚ました。身体を起こせば、視界に入ってくるのは見慣れない寝室の風景。白とベージュで統一された室内は、シンプルで落ち着いた雰囲気を纏い、静かにそこに佇んでいる。

「……」
はっきりしない頭で二度、三度と視界を巡らせた後、
――はぁぁ……
長い、長いため息を吐いて髪をかき上げる。
考えるまでもなく、美早の寝室。昨夜散々逃げ回ったあげく、結局押し倒されて体調を崩した、史上最悪の初夜の記憶は、一夜明けた今も嫌になるぐらい鮮明に彼の頭に焼き付いていた。できることなら式の記憶とともに、全てをなかったことにして忘れてしまいたいけれど、事情が事情なだけにそうもいかない。
全く、とんでもない女を妻にしてしまったものだと、再びため息を吐いた時。
「ん……」
どこからかくぐもった声が聞こえ、アルヴィフリートはびくりと身を震わせた。
聞こえてきたのは一瞬で、それも小さな、小さな声だったが、女嫌いの彼なら分かる。あれはアルヴィフリートの天敵、この世で一番恐ろしい、悪魔の声だ。
恐る恐るベッドから下りて室内を見回せば、長椅子にうずくまる小さな影が目に入る。ゆったりとした長椅子に、これでもかと身を縮め横たわる美早の姿。人一人余裕で寝ころべる大きさだというのに、どうしてこんなにも窮屈な体勢で寝入っているのか。猫のように身体を丸め、時折もぞもぞ、と動く彼女に怯えながら、アルヴィフリートはとりあえず近くにあったクッションを手にとった。いつ悪魔が目覚めてもいいように、なにか身を守るものが欲しかったのだ。それが例え、彼の大きな図体どころか顔さえも隠せないような、小さな飾り用のクッションであっても。
「ん、う、あれ？」
しばらくして美早はぼんやりとした様子で目を覚ます。どうやら、もぞもぞごそごそ、忙しなく身じろぎを繰り返していたのは、眠りから醒め現実へと戻ってくる前兆だったらしい。焦点の定まらない

瞳が右往左往して、クッションに隠れ切れていないアルヴィフリートを見つけると、突然ごにょごにょと独り言を言い始めた。
「おかあさん……いや、おかあさんはこんな髪じゃない。お父さん、は髪すらないし……ええと、ナティーシャ……は赤い髪だし、ユーディリア……はもっと黄色いし」
寝ぼけているのか、半分夢に浸かった状態でああでもない、こうでもないと繰り返す美早は、
「あ、そうか、ヘイカ！？」
突如勢いよく顔を上げた。
「――っ！？」
不意打ちのように名前を呼ばれたアルヴィフリートは、驚きのあまりズササッと後ずさりする。反対側にあった長椅子につまずいて尻餅をつくように倒れ込み、また一つアルヴィフリートの中に抹消したい記憶が増えた。
「お、おはようございます……っていうか、大丈夫ですか？」
「平気だ」
投げやりに言葉を紡げば、向かい側で美早が笑う気配がして。アルヴィフリートはますます情けなさが募るのを感じた。
「笑うな！」
八つ当たりのように怒鳴りつけると、美早は驚いた様子で首を振り、口を開く。
「別に、ヘイカを馬鹿にしたわけでは。……その、随分お元気になられたので安心したと言いますか」
――嫌味か。
ムッとして、顔を上げると、しかし美早は本当に安堵したような表情でアルヴィフリートを見ていた。
「気分はいかがですか、ヘイカ」
――最悪だ。
答えようとして、ふと美早が、自分をからかっているのではなく、昨夜のことを言っているのだと気づく。

「別に、大丈夫だ」
「どこか、痛いところはありませんか？　吐き気がしたり、頭痛がしたりすることは」
「ない」
まるで侍医のように事細かに聞いてくる美早にきっぱりと否定して返せば、「よかった」とまた安堵するように顔を綻ばせる。
「……お前、」
なにを考えてるんだ？　問いかけようとしたとき、タイミング悪くノックの音が響き、アルヴィフリートは決まり悪げに口を噤んだ。
「陛下、王妃様、ご起床の時間で御座います」
扉の向こうで高い声が響く。
窓の外はすでに明るく、鳥達のさえずりも先程より大きく聞こえてくる。城に仕える者たちはとっくに働き出し、今日もまたそれぞれの仕事をこなしていくだろう。美早付きの侍女たちも、また今日の仕事を始める為に、こうして主の身支度を整えにやってきた。
――ああ、夜が明けたのだな。
アルヴィフリートは感慨深く溜息を吐いた。どんなに情けなくとも、無事に初夜をやり過ごせた、この安堵感。無様な姿も、みっともない振る舞いも、全部全部美早には見られてしまったわけだが、もうそんなことどうでもいい。明けない夜はない。朝、万歳！
「あの、ヘイカ……？」
若干ハイになっていたアルヴィフリートを、次の瞬間美早のうかがうような声が引き戻す。
「なっ、なんだ！」
すぐさま警戒心を露にする彼に、美早は苦笑して。
「別に、そんなに怯えずともなにもしませんよ。それより、侍女たちが世話をしにやってきたんですけど、ヘイカ、どうしますか？」
「どうって……」
なにが、と返しかけて、アルヴィフリートは重大な事実に気がついた。

侍女。それは王族や貴族などに仕え、雑用や身の回りの世話をする女。そう、女なのだ！　ここは後宮で、国王である彼以外は男子禁制の女の園。つまり、まだ開かれてはいないが、あの扉の向こうには彼の苦手な女がうじゃうじゃ――！

「帰る」

「え、はい？」

くるりと踵を返して窓辺へ向かうアルヴィフリートに、美早が首を傾げて聞き返す。

「帰ると言ったんだ。こんな何が出てくるか分からない恐ろしい場所、一秒たりともいられるか」

「後宮を化け物屋敷みたいに言わないでください。……それに、帰るって、一体どこから」

「窓から」

言うと、アルヴィフリートは窓を開けすぐにでも飛び降りようと、身を乗り出す。

「ちょっ、危ないですよ！」

真っ青になって美早が彼の服の裾を掴むが、

「触るな！　放せ」

アルヴィフリートは慌てふためき彼女の手を振り払おうともがいた。

「放したら落ちちゃうじゃないですか」

「落ちた方がマシだ！」

言うアルヴィフリートに、美早は「馬鹿ですか！」と怒鳴り返し、ますます力を入れて服の裾を握り締めた。いくら彼の運動神経がよかったとしても、ここは二階。それも各階の天井が高く造られている為、実際には三階ほどの高さがあるのだ。寝巻き一つで、履物もスリッパのような簡素なものしか身に着けていない彼が、無傷で地面に辿り着けるとは到底思えなかった。

「危ないですってば！」

半ばパニックになりながら身をよじり逃れようとする夫の服を必

死で掴むが、昨夜も思ったように複雑なつくりのくせに脱がしやすい――訂正。脱げやすいこの衣装。
「放せ！　放せえぇぇ！」
暴れるアルヴィフリートにどんどん寝巻きははだけていき、
「ミハヤ様？」
騒ぐ二人に不審に思った侍女たちが顔を覗かせ、それに反応してますますアルヴィフリートが身を乗り出そうとするので、美早は「入ってきちゃダメー！！」今までにないほど声を張り上げたのだった。

05

「まったく、困った方」
テーブルを挟み向かい側で食事をとる夫に、美早はこれみよがしに溜息をついた。
身投げしようとするアルヴィフリートをなんとか押しとどめ、部屋に戻したのがおよそ一時間前。それでもパニックを起こし動揺する彼を宥め賺して、老年の侍女長たちに着替えを手伝わせた。
どうしてか彼は、若くはないといっては失礼だが、それなりに年を召した女性に対してだと態度が平常に戻るらしい。彼が幼い頃から仕えているからなのか、それとも特別“若い女性”に対してトラウマがあるのか、それはよくわからないが。今、食事をしているときも、先ほど着替えを手伝ってもらっていたときも、美早や二人を起こしにきた侍女たちに見せたような過剰反応をみせることなく、ごくごく普通に、“いつもの陛下”として振舞えている。それでも若干、挙動不審気味なところもあるのだが、それは同じ部屋の中に美早と、若い侍女たちが侍っているからで、老年の侍女たちのせいではない。
この国では王妃夫妻が初夜の後、後宮で揃って食事をとるのが慣例らしく、アルヴィフリートは相変わらず化け物屋敷ならぬ後宮から抜け出せずにいた。初夜自体過ごすつもりのなかったアルヴィフリートはそもそもその話を美早にしていなかったはずなのだが、侍女たちからそれを聞かされた彼女は是が非でも一緒に食事をとると言い張った。そうして、嫌がる彼を無理矢理引きとめ、食堂へと連行し、今に至る。
「まさか朝っぱらから身投げなさろうとするなんて、心臓が止まるかと思いましたよ」
やれやれ、と首を振って茶を飲み干した美早に、側に控えていた侍女ユーディリアが新しいお茶をカップに注いでくれる。

麗しい金髪に青色の瞳をした美人の侍女は、アルヴィフリートとの婚礼の支度を手伝ってくれた侍女のうちの一人だ。色っぽい外見に隠されたその本性はゴシップ好きで噂好き。野次馬根性たっぷりな彼女は、今日も密かに行なわれた『誰が国王夫妻の朝食の世話をするか、侍女役目争奪戦』に見事勝利し、この場に侍っていた。

ありがとう、と言って茶を受け取る美早に、ユーディリアは美しい微笑を返すが、その実、内心では興味津々に主とその夫の会話に耳を傾けていることだろう。

（まあ、ユーディリアじゃなくても、気になるだろうけど……）

ちら、と夫の方に視線をやり、美早は呆れながら思った。

妻の一挙一動を、怯えながら見守る夫の姿。平常心を装いつつも、美早が動くたび、アルヴィフリートの身体もビクリと跳ねる。昨夜の美早の行き過ぎた行動も原因となっているのだろう。女の園に留まるぐらいなら身投げした方がマシとは、重症すぎて笑う気も起きない。

「ヘイカって、本当に女性が苦手でいらっしゃるんですね」

溜息交じりに言うと、アルヴィフリートは食事をする手を止めて、ジトと恨めしげな視線を寄越した。

「だから、私は最初からそう言っているではないか」

「まあ、聞きましたけど」

まさかここまでとは思ってなかったのだ。

しれっと言う美早に、アルヴィフリートはわなわなと身体を震わせる。

「お前は本当に悪魔のような女だな。人の弱点をついて好き勝手するなど、恥ずかしくないのか」

「いや、恥ずかしくないのか、と言われましても……」

正直に言うと、少し楽しかった。

こちらに来て以来、巫女様、巫女様、と期待をかけられプレッシャーの連続で、怯えるアルヴィフリートをからかうのは言っては悪いが、いいストレス発散になったのであった。

「嫌がられるのをみると、ますますしてみたくなるのが人というものではありませんか？」
「そんな悪趣味、お前だけだ」
「でも、芸人とかだと『押すな』は押せ、『やめろ』はもっとやれ、の意になりますし」
「芸人？」
アルヴィフリートは首を傾げるが、そもそも美早は芸人でもなんでもないので、説明したところでその理屈は否定されて終わることだろう。
「お前の国の常識はよくわからん。とにかく、我が国では女が嫌がる男の腹に乗っかり、腕を拘束した挙句、服を脱がそうとするなど言語道断。いるとしたらそれは痴女か気狂いだけだ」
言う彼に、美早の周囲が心なしざわつく。
そりゃ、日本でだって嫌がる男の人をどうこうする女性が普通かといったらノーだろう。そも、女性に限らず嫌がる異性をどうこうすること自体あれなのだが、しかし今はそんなことよりも。
「あの、ヘイカ？　よく人前でそんな恥ずかしいこと言えますね」
ここは後宮の食堂で、食事をしているのは彼と自分の二人しかいない。が、しかしその世話をするため十何人かの侍女たちが侍っているのだ。
聞かぬフリをしていた侍女たちの視線が、今度ばかりは自分に集まるのを感じ、美早は羞恥心から頬が赤くなるのが分かった。ついで、アルヴィフリートもようやくそれに気づき、八つ当たりのように声を上げる。
「お前がしたことだろうが！」
「いや、まあそうなんですけど。別にこんな人目のある場所でおっしゃらなくても」
ユーディリアなんか目を丸くして美早を凝視している（これは、後で絶対問い詰めてくるだろうな……）。世話をしてくれる侍女たちと仲良くなるとこういうときが厄介だ。

美早は火照る頬を押さえながら、またアルヴィフリートに向き直り、口を開いた。
「昨夜のことは、確かに自分でもやりすぎたな、と反省はしております」
ちょっとからかうつもりで、本当に、あそこまで体調を崩させるとは思ってもみなかったのだ。
だから、朝体調を聞いて「大丈夫だ」と返ってきた時はほっとした。クレイや、彼の世話係を後宮に呼ぼうとも考えたが、後宮は男子禁制で、しかも体調を崩した本人がいい、と首を横に振る。何も出来ずに、ただ彼から離れて様子を窺うしかできなかった自分に、どうしようもなく罪悪感が募った。
やりすぎた、酷いことをしてしまった。確かに彼にも否はあるのだけど、しかしここまでする必要はあったのだろうか、と。
「本当に、申し訳ありませんでした」
しおらしく頭を下げる美早に、アルヴィフリートは戸惑うような様子をみせる。昨夜美早が仮病をつかい彼を騙したときのように、またなにか企んでいるのではと思っているのかもしれない。
（やっぱり信じてもらえないよね……）
顔を上げようとした美早に、
「別によい。分かってくれたのなら、それで」
予想外にも、アルヴィフリートは許しを与える言葉を紡いだ。
「許してくれるんですか？」
顔を上げると、アルヴィフリートも美早を見ている。
（あ……）
その視線に嫌な既視感を覚え、美早はまた視線を下に向けた。
「許すも何も、私の方にも落ち度があった。巫女の望むものなんでも叶えると言って置きながら、あのように動揺し、まあ、この欠点は治せそうにもないのだが……。けれど、それに関すること以外なら。約束に違わず、お前の求める全てを叶えたいと思う。この国の王として、ミハヤ＝サトウの夫として」

真摯に言葉を紡ぐ彼はまさしく世に賢帝と謳われる国王の姿をしている。先ほど慌てふためいていた彼の変わり様に、侍女たちはみっともない姿など忘れてしまったとでも言いたげに感嘆の溜息をついた。

「なにか不自由なことがあればすぐに言ってくれ、私でなくとも、クレイや、侍女などを通してでもよい」

食事を終えて立ち上がろうとする彼に、ようやく美早は顔を上げた。

「ヘイカ」

「なんだ」

振り向く彼はしっかりと美早の瞳を見つめ返す。

美早はそれに、にっこりと美しい微笑を浮かべて口を開いた。

「早速一つお願いしたいことがあるのですが」

よろしいでしょうか？　首をかしげる彼女に、アルヴィフリートは首肯して続きを促す。

紡がれる言葉が、彼を地獄へ突き落とすものだとも知らずに。

06

「あはははっ」
執務室。国政に関わる様々な執務が行なわれるこの部屋で、クレイは腹がよじれるほどの笑いに襲われていた。目に涙まで浮かべて笑い転げる彼の対面には、不機嫌を顔中に滲ませたアルヴィフリートがいる。
「笑いすぎだ、クレイ」
窘める声にいつものような覇気はなく、朝から地獄を体験した彼は、まだ一日が始まったばかりだと言うのにすっかり疲れ切っていた。
『これからも一緒に朝食をとって下さいませんか？　一人の食事というのは味気ないものですし、私たちは折角夫婦になったのですから、日に一度はヘイカの顔が見たくて……』
別れ際の妻の発言。ようやく後宮を抜け出せるとほっとしていた彼を、地獄へ突き落とした悪魔の言葉だ。
「私はちゃんと“欠点（おんなぎらい）に関わること以外なら”と前置きしたはずなのだが……」
まるっきりそれを無視した上、美早は『できれば、執務の空き時間などにもこちらに顔を出していただけるとうれしいのですが』とまで付け足してきた。
途端、室内の空気はざわめき、侍女たちの意識は一斉にアルヴィフリートへと向けられる。可愛らしい妻のおねだりに、国王が一体どう返事をするのか。固唾を呑んで見守る――というか、ほとんど睨んでいると言っていい侍女たちの視線に、アルヴィフリートはただ黙って首を縦に振るしかなかった。
「それで、まんまと要求を飲まされて帰って来たというわけですか」
「ああ……」
力なく項垂れるアルヴィフリートに、クレイは目の端に滲んだ涙

を拭いながら、「そもそも『何でも叶えよう』発言などしなければいいのでは？」と進言する。
しかし、
「ミハヤは我が国を救った巫女なのだぞ。その望みを叶えようと思うのはこの国の国王として当然のことではないか」
我らが国王陛下はなんともお人好しな性格でいらっしゃった。
グランディール王国の民達は皆、国を救ってくれた姫巫女に対し、多大なる恩義を感じ、感謝している。けれど、その中でも国の代表者としてのアルヴィフリートの思いは強く、彼は始終姫巫女を気遣い、心を砕こうとしていた。

「問題はミハヤ様の要求が常に我々の発想の斜め上をいくということですね」
ふむ、と口元に手を当てていうクレイに、アルヴィフリートは深い、深い溜息を落とす。
美早は一体、どんなことを思い、朝食を一緒にとりたいなどと言うのか。王妃の座を望み、夫と一緒にいたいと願う彼女は、傍目から見れば陛下を慕っているようにしか見えないのだが。
「それはない、絶対に」
アルヴィフリートはきっぱりとそれを否定する。
「どうしてそう思われるのです？」
「どうしてもなにも、王妃の座を望んだのは『優雅で豪華な余生を送りたい』からだと言っていた」
それも、躊躇いもなく、あっさりと言ってのけた。
信じられない女だ、と眉を寄せていると、向かい側に立ったクレイが「ああ、それは私も聞きましたけど」と、これまたあっさりした様子で頷いた。
「お前にも言ったのか、あいつは」
「ええ」
式の少し前、ご機嫌伺いついでに結婚の理由を訊きに行った彼に、

美早は同じようなことを言った。
『王宮にいれば、それなりの贅沢ができるでしょう？　綺麗なドレスに美味しい食事。内政に口出しして国を傾けさせない限り国民からは文句も出ないでしょうし。国を救うなんて大役を終えた今、残りの余生を人並以上に豪華で優雅な空間で過ごしたいと願っても罰は当たりませんよ』
そう聞いたとき、その奇抜な発想に思わず噴出しそうになったものである。
普通の女性は美貌のアルヴィフリートを見て、少しぐらい心が動かされるものだというのに、彼女にとって優雅で豪華な生活の方がメインで、アルヴィフリートはその付属品に過ぎないと言う。勿論王妃になれば様々な権力が手に入るが、彼女は権力うんぬんとかではなく、ただ王妃となってついてくる贅沢な生活が欲しいと、そう言うのだ。

「まあ、眼中にない相手を突然ふと意識してしまうこともなくはないですが」
ニタリと笑うクレイに、アルヴィフリートは（眼中にない……）眉を寄せ、髪をかきあげる。
「お前は、なにがなんでもミハヤが私を好きだと言いたいのだな」
「客観的に見ればそうみえる、と申し上げているのです。恋情を抱くまでいかずとも、ほんの少し、興味を抱かれているのかもしれませんよ」
「興味？」
「美しい異性を側に侍らせたいと考えるのは男だけじゃないということです」
「私を側に置くことで愉悦を覚えるというのか？　ミハヤが？」
ありえない、と首を振る。
「そんな女か、あれは」
きっぱりと否定するアルヴィフリートに、クレイは「おや？」と

片眉を上げた。
「もしや陛下の方がミハヤ様に好感を抱いていらっしゃったりします？」
むふ、とほくそ笑むと、すかさず首を横に振って否定される。
「馬鹿なことをいうな。そうではない、そうではなくて……あれは、昨晩私を押し倒し笑っていたのだぞ」
世にも恐ろしいものでも見たかのように体を震わせる主に、「はい？」クレイはきょとんとして見つめ返した。
「ミハヤは女嫌いの私の弱点をつき、その身をもって迫ることに快感を覚えているのだ。あの、昨晩のミハヤの顔といったらもう……！　悪魔とはああいうものを言うのだ！　だから、つまり私が言いたいのは」
「ミハヤ様は陛下のことが好き？」
「違う！」
アルヴィフリートは声を上げて断言する。
「あれは、私のことが嫌いなのだ！　好きな相手にあそこまでの嫌がらせが出来ると思うのか、クレイ」
身を乗り出して主張されるが、けれど彼に嫌がらせをしている図というのは、女性嫌いの彼から見ると嫌がらせになるのであって、傍目からみるとただ好きな相手に迫る女の図に見えないこともない。
「どうして陛下はそんなにもミハヤ様がご自分を嫌っていることにしたいのですか」
「“したい”のではなく“事実”だ」
「ではお聞きしますが、ミハヤ様が陛下を嫌われる動機は？」
「それは……」
アルヴィフリートはしばしの間考え込む。
「私がミハヤをこちらに召喚したことを恨んでいるのでは……」
「ないですね」
今度はクレイが間髪入れず否定する。
「陛下はただご決断なされただけであって、巫女様を召喚するとい

う案は大臣達全員で話し合って出したもの。陛下お一人で気に悩む必要はどこにもありません」
一蹴してやると、アルヴィフリートはどこか納得いかない様子で顔を顰める。
クレイは嘆息して、
「陛下は負い目を感じているだけなのではないですか？」
と口を開いた。
「王国のこと、自らの手で救うことが出来なかったことに対し、以前愚痴をこぼされていらっしゃいましたよね。今でも、気になさっているのでは？」
「それは……」
ぐ、と押し黙るアルヴィフリートに、クレイは続ける。
「我が国が荒れたのは先代、先々代の王に才がなかっただけのこと。陛下は王位についてから様々に手を尽くし、力を尽くしていらっしゃったではありませんか。王国は豊かになりました。それは巫女様のおかげではありますが、陛下が尽力なさったおかげで、あれ以上の荒廃を食い止められたのではないですか」
どこか慰めるような口調で言われ、アルヴィフリートはそれに宰相としてではなくクレイ個人の意図が含まれているような気がして、苦笑した。
自分が誰よりも美早に恩義を感じるのは、王としての務めが果たせなかった負い目があるからだが、けれど、クレイはそれを、必要以上に気負うことはないのだと諭す。
「陛下が、ミハヤ様に嫌われているように思うのは、彼女に負い目を感じているからなのでしょう」
「それも、そうかもしれぬ」
まだどこか納得いかなげに頷く彼に、「プラス“女性嫌い”というのも少しはあるでしょうけれどね」軽口混じりに言って「あ、そうだ」クレイは突然何かを思いついたように手を叩いた。
「どうした？」

アルヴィフリートが訊ねると、クレイは嫌な笑みを浮かべてこちらを見返した。
「思いついたんですけど、この際、陛下は女嫌いを克服されたらいかがです？」
「は？」
「ほら、ミハヤ様の意図は置いておくとして。朝食をご一緒されたり、散歩をともになさったりすることはいいリハビリになるんじゃありませんか」
意味が分からず首を傾げるこちらを放置して、クレイは「いやぁ、なんて名案」と自画自賛する。
「な、なにが名案だ、なにが」
相手はあのミハヤだぞ！
全力で首を横に振るが、しかしそれで決まりだ、とにこやかに笑みを浮かべてくる。
「陛下の女嫌いのせいで跡継ぎもまだですし、この機会に少しは女性に慣れる努力をなさって下さいよ」
「お前は私に死ねというのか」
「大丈夫、女嫌いで亡くなった方は今までいませんので」
ほんのちょっと、地獄を見る程度ですよ。
笑う宰相に、アルヴィフリートは早くも地獄を見たのだった。

07

東の果てからオレンジ色の太陽が顔を出し、上っていく。
ほんのりと朝焼け色に染まる空を見上げながら、美早はふあぁ、と欠伸をこらえ口元に手を押し当てた。
「ねえ、まだ？」
振り返ると、室内には誰もいない。
美早は視線をそのままぐるりと巡らせて、衣裳部屋の方を見やった。もう一時間も前からそこに、数人の侍女たちが籠もって今日の美早の衣装選びをしていた。
「今しばらくお待ちを、ミハヤ様」
どこか弾んだ声はナティーシャのもの。
「ねえ、やっぱりそれでは少し派手過ぎると思うの。こちらはどうかしら？」
「あら、いいわー。でもちょっと待って、あちらのドレスも素敵ですわよ」
ユーディリアと他の侍女たちが会話する声が聞こえ、美早はやれやれと溜息をついた。
陛下と朝食を共にすると聞いて、侍女たちは昨日からてんやわんや。髪飾りやその他アクセサリーを見繕い、やっぱりドレスは重要よね？　男性受けする、でもあざとすぎないデザインのものといったらどれになるかしら。朝だということも配慮して、あまり派手過ぎないものがいいわよね。だからといって地味すぎず、清楚だけど男心をぐっと掴むような――
その論議は延々と続き、朝早くに起こされた後もどのドレスを美早に着せるかで争いは続いているようだった。できれば結論が出てから起こして欲しいものだと思うのだけれど
「ミハヤ様にはお着替えをなさる前に湯浴みをしたりお化粧をなさったり、色々と準備していただかねばならないことがあるのです！」

物凄い剣幕で詰め寄られ、美早は口を挟む間もなく起きて早々バスルームに押し込められた。
それから長い時間をかけて起き抜けの身体を磨き上げられて、基礎化粧品を塗られ、ベースメイク、リップにチーク、薄めのアイシャドウに、その他諸々。
それでもまだドレスは決まらない。
おかげで顔と髪型だけばっちり決まっているのに寝巻き状態という不自然な姿で放置されていた。
「そんなに気合をいれなくてもいいと思うのだけれど……」
第一、これから陛下とは毎日朝食をとるのだ。その度にこれでは、先が思いやられる。
「それに、昨日はそんなにバッチリメイクだってしなかったし」
「それは、陛下をお待たせしてはいけないと思ったからですわ」
ぼやいた美早に、ようやくドレスが決まったのか赤髪の侍女ナティーシャが衣裳部屋から出てきて言葉を返した。その後ろにはミルクティベージュの色をしたドレスを抱えたユーディリアがいる。
「ようやく決まった？」
訊ねると、侍女たちは揃って「はい」と頷いた。
用意されたドレスは全体が淡い色で統一されたシンプルなものだ。開きすぎないVネックの首周りに、胸元には洒落たレースのリボンがあしらわれていて、清楚で品のある雰囲気を醸し出している。
「素敵。こんなのあったんだ」
思わず呟く美早に、ユーディリアは誇らしげに笑みをこぼした。
「ユーディリアが選んだの？」
「そうですわ。実はユーディリアは王宮に仕える前、流行に敏感で衣装に五月蝿い然る公爵夫人に仕えていたんです」
「へえ、そうだったんだ。ナティーシャはずっと後宮仕えよね？」
「ええ。私は幼い頃からミハヤ様に仕えるまでずっとこちらに勤めておりますわ。他にいくところもありませんでしたし……さてと、完璧！　できましたわ、ミハヤ様」

着付けが終わり、鏡の前に立たされた美早は、なんだか複雑な気分で鏡を覗き込んだ。
「なんか、やっぱり気合入れすぎじゃないかしら」
鏡の中の自分はいつもの自分じゃないようで、不思議な感じだ。
式のときも綺麗にメイクをしてもらったけれど、今はただの平日で、なんのイベントもない。
ただ朝食を食べるというだけなのに、こんなに気合を入れる必要が果たしてあるのだろうかと首を傾げてしまう。
「あら、気合を入れるのは当然ですわ！　なんたって、陛下と朝食をご一緒なさるのだから」
「ええ、ミハヤ様にはばっちりきっちり着飾って朝食に臨んでいただかなくては……！」
「なんだか戦場へ行くみたいね」
苦笑いする美早に、ユーディリアは「確かに、そうですわね」と肯定を返した。
「いいですか、ミハヤ様はこれから恋という名の戦場に向かわれるのです」
「はい？」
キョトンとする美早に、ユーディリアだけでなく、何故かナティーシャと他の侍女までもが謎の闘志を漲らせた。
「ドレスは女性の戦闘服！　ミハヤ様は一体、私たちが今まで必死にドレスを選んでいたのをなんだとお思いですか？」
「な、なんだろう」
「ミハヤ様に陛下の心をがっしり掴んで、落としていただくためですわ！」
ズバッと言ってのけるナティーシャに、美早は一瞬（落とすって……地獄に？）とボケてみたくなったが、おそらくは『恋』の方だろうと自答する。しかし、女に迫られることをなによりも恐怖する彼にとって、それは、奇跡でも起こらない限り無理なんじゃないだろうか。

「ちょっとそれは難しいんじゃないかな。そもそも陛下は女嫌いでいらっしゃるし……」
思ったままに告げると、今度はユーディリアから「弱気になってはいけません！」と叱咤の声が上がる。
（いや、弱気っていうか、事実を述べたのだけど）
しかし彼女たちは美早に奇跡を起こせと言ってくる。
「いくら女嫌いといえど、陛下も一応は男性でございます。今まで大臣達がどんなに進言しても妃を持とうとなさらなかった陛下が、この度初めて奥方をもたれたのですよ？」
「それはまあ、やむにやまない事情からと言うか。それより、『一応』って……」
「頑張って迫れば、きっとお気も変わるはずです。いいえ、変わります、変えて見せます。ミハヤ様はこんなにも可愛らしく、性格のよいお方なのだから、それを知れば陛下だってきっとミハヤ様をお好きになられますわ」
「でも、私、別に陛下と結婚したからってそういう実質的な夫婦関係は求めていないのだけど……」
侍女たちの憧れを壊すようで悪いが、美早は陛下に夫婦のなんたるかを求めてはいない。それは、この度の結婚には色々と理由や思惑などもあったりするのだけど、陛下に対しては正直、あまり良い感情を抱いているわけではないのだ。
おそるおそる侍女たちを見やると、彼女たちはなぜかきょとんとした顔で「存じておりますが」と言葉を返してきた。
「ミハヤ様は陛下を愛されて結婚を望まれたわけじゃないのですよね？　そのことでしたら私たち、きちんと理解しておりますわ」
あっさりとした様子の侍女たちに、美早は「あ、そうなの？」と拍子抜けする。
今までの様子からいくとどうにも二人をくっつけようとしているように思えたのだけど、勘違いだったのだろうか。
首を傾げる美早に、ユーディリアはまた突拍子もないセリフを吐

いた。
「ミハヤ様、女性は愛されてなんぼですわ」
「はい？」
「愛のない夫婦よりも、愛のある夫婦。愛して、尽くされることこそ女性の至上の喜びです」
突然女性の喜びについて語りだした彼女を（もしかして仕事疲れでおかしくなった？）同情交じりで見つめるが、けれど周りの侍女たちは真剣な表情でユーディリアの話に頷きを返していた（え、皆大丈夫？）。
「ミハヤ様」
「は、はい！」
「私たちはミハヤ様に幸せになって欲しいのです」
「え？」
きょとんとする美早に、ユーディリアは続けた。
「例えお二人が愛し合って結婚されたのでなくても、いつかそうなればと思っております。それは陛下や国のためなどではなく、ミハヤ様のために。ミハヤ様が今後、幸せな生活を送られるために、お二人がお互いを思いやる夫婦になってくだされば、そう思うのです。お互いを嫌悪しあう夫婦など、悲劇以外の何者でもありませんもの」
「ユーディリア……」
「だからこそ美しく着飾っていかなければならないのです！　確かに朝からそれほど気張っていく必要はありませんが、ある程度は気合を入れねばいけません。全てはミハヤ様に陛下を落としていただく為に！」
「結局そこへ戻って来るわけ？」
「いざ、開戦です！　ミハヤ様」
闘志燃え滾る侍女たちの様子に、うっかり感動しかけていた美早はがっくりと肩を落とした。
（そりゃぁ、私もそうなればいいな、とは思うけど……）

必死の形相で自分から逃げ回る夫を思い浮かべると、それが叶うのは遥か先のことのような気がする。

「いざ、開戦、か」

侍女たちの闘志が伝染でもしたのか。なんだか妙なやる気が湧いてきて、美早は最終確認を行なう侍女たちと一緒に鏡を覗き込んだのだった。

08

「おはようございます、ヘイカ……？」
部屋に入り一礼した美早は、寸の間室内に視線を彷徨わせた。
中央に長い、長い食卓が置かれた広々とした部屋は、一昨日美早とアルヴィフリートが式を挙げた際、貴族たちとの食事会で使用した大食堂だ。美早の予定では昨日みたく後宮の食堂で朝食をとるつもりだったのだが、アルヴィフリートがそれを断固拒否した結果、この場所で食事ということになった。
食卓と椅子を片付ければ体育館としても使えそうなほど広く大きなこの部屋の中、愛すべき夫は、十数メートルはあろうかという食卓の、一番端の席に腰を下ろし、こちらを見ている。
「なんだ、そちらにいたのですね」
夫の姿を見止め、アルヴィフリートの方へと歩み寄ろうとした美早は、しかし「王妃陛下」傍らに控えていた近衛服の青年に行く手を遮られてしまう。
きょとんとして青年を見つめれば、
「陛下の席はあちらです」
言ってアルヴィフリートの向かいの席――つまり、夫から十数メートルほど離れた、テーブルのもう一つの端を指差される。
「あの、」
一体これはどういうことか。
口を挟む間もなく、椅子を引いて着席を促されて、美早は納得いかなげな表情でそこに腰を下ろした。
――これは、うまくやったものだなぁ。
向かい側、遥か彼方にいる夫を見やると、不安そうな顔の夫と、その横には笑みを浮かべた宰相クレイの姿が。
後宮で食事をとらないことまでは想定内だったが、まさか大食堂の端と端で食事をとらされることになるなんて。一国の主がそんな

セコイことするはずないと思っていたし、馬鹿正直なアルヴィフリートならきっとすんなり美早の要求を飲むだろうと思っていたのに。
さてはて、どうしたものかな。美早はふと視線を巡らせて背後に控える侍女たちを見やった。
今日の朝食係争奪戦に勝ち抜いたのは、昨日も朝食係を勝ち得たユーディリア（どうやら彼女はくじ運が強いらしい）と、今朝方ウキウキで美早を叩き起こしてくれたナティーシャ、それとリーナとローズという名の侍女たち。
主の世話をするとは名目で、国王夫妻の朝食風景をデバガメしようとついてきた彼女達だが、この状況に一体どんな感情を抱いているのやら。
微笑を浮かべつつも無言の圧力――おそらく文句を言いたいのだろうが国王の許しもなく勝手に口を開くことはできない――を振り撒く彼女達に、背筋が凍るような恐怖心を抱きながら美早は、やはり見なければ良かったと顔を前に戻した。きっと内心ではせっかくのおめかしが台無しになった挙句、主（ミハヤ）にこのような扱いを取ったことを怒り狂っているのだろう。
――とはいえ、それは美早とて同じこと。
折角昨日の仕返しをしてやろうと思って朝食の誘いをかけたというのに、こんなに離れていては手も足も出せないではないか。
ちょっと考えた後、美早は昨日も使った『いじらしい妻作戦』を実行することに決めた。
今日は前回と異なり、周りに控えているのは近衛の制服を着た青年達ばかりだけれど、背後に控えた侍女たちの圧力もプラスすれば、きっとそれなりに効果はあるはず。
既に侍女たちの無言の圧力に気圧され気味の近衛と夫に向かい、美早はおずおずと恥ずかしそうな表情を作って口を開いた。
「あの、ヘイカのお顔が見えないのでもうすこしお側に行きたいのですけれど……」
と、何人かの従者はおのれの主を見て複雑な表情を浮かべるが、

大半の者は美早に同情し心を傾けるような仕草を見せる。思ったよりも『いじらしい妻作戦』は有効なようだ。
「……っ、わ、わかった」
アルヴィフリートは寸の間表情を消した後、ぎこちない返事を寄越し、頷く。
おそらく全く予想していなかったわけではないのだろう。すぐに新しい席が用意され、美早はにっこりと笑みを浮かべてその場所――それでもまだ一メートルは距離がある――に腰を下ろした。
全く、最初からこの場所へ座らせてくれれば良かったのに、ワンクッション置いたのは意地でも女を近づけたくないという悪あがきか、もしくは近寄られる前にある程度心の準備をしておきたかったのか。
「そんなに嫌われると、傷つきます」
引き続き『いじらしい妻』の態で言葉を紡ぐと、侍女たちの眼力は増し、近衛たちのえもいわれぬ申し訳ない感が募る。
――ふむ、確かに「いざ開戦」とは言いえて妙ね。
今朝の侍女たちの言葉を思い返して、美早は一人くすりと笑みを浮かべた。
近づこうとする美早と、離れようとするアルヴィフリート。二人はそれぞれに策略を立てて己の思うように関係を運ぼうとするけれど、今のところは美早の方が一歩上手といったところか。彼女の一挙一動にビクビクと恐怖心を募らせる夫に、どう追い詰めてやろうかと考えを巡らせる。
とりあえず昨日の仕返しは出来たからいいとして、今度は今日のこの仕打ち（一緒に朝食を食べると言いながら、美早を遠ざけようとしたこと）に対する仕返しをしなくてはね。
少し悩んだ後、美早はまたにっこり笑って夫にとっての無理難題をつきつける。
「ヘイカ、今日は午後お暇な時間ありますか？」
「な――」

「ほんの少しだけ午後のお茶につきあって欲しいのです。いえ、長くはお時間いただきませんので」
ないと断ろうとアルヴィフリートに被せてまで美早は続ける。
やんわりと、けれど有無を言わさぬ雰囲気を纏った問いかけに、再度断ろうと口を開いたアルヴィフリートを制して、何故か返事を返したのはクレイの方だった。
「どうぞ、どうぞ。少しと言わず、午後はごゆっくりと休憩時間を持たれ、お休みになられるといいですよ」
私の方でできる仕事は片付けておきますから。
妻の脅迫と側近の裏切りにあったアルヴィフリートは、その日泣く泣く妻との午後の茶会に参加することになる。

「覚えていろよ、クレイ」
執務室に入り書類を広げながら恨めしい声で言った主に、クレイはきょとんとした顔でわざとらしく首を傾げた。
「何のことです？　私は陛下のリハビリの手助けをしようと思ったまでのこと」
全ては陛下の御為に。うやうやしく頭を下げるクレイの顔には、けれどニヤニヤ笑いが張り付いている。
「陛下も長テーブルを用意してミハヤ様を遠ざけるようなセコイ真似などせずに、どーんとあの方の愛情を受け止められたらいいのですよ」
「なにが愛情か。そもそもあの案はお前の助言からではないか」
「そうでしたっけ？」
「まさかお前、あれでミハヤが腹を立てるのを見越していたな？」
「さてはて、何のことでしょう」
「お前というやつは！」
声を荒げるアルヴィフリートに、クレイはまあまあ、と両手で彼

をなだめるようなポーズをする。
「とにかく決定してしまったことは仕方ありません」
お前が勝手に返事をかえさなければなにも決定などしなかったのに。恨めしげにぼやけば、クレイは「おや、人のせいにするのはよくありませんよ」と勝手なことを言う。
「人のせいもなにも、事実お前のせいではないか」
「いやいやいや、私が返事をせずとも、ミハヤ様はなんとしてでも陛下と時を過ごそうとされたはずですよ。背後の侍女たちの迫力も凄かった……」
言って大袈裟に身震いをした後、
「まあこれもリハビリの一貫。せいぜい楽しんできてくださいよ」
とニカリと笑う。
「お前、他人事だと思って……」
「事実、他人事ですから」
己の口調を真似して言うクレイに、アルヴィフリートは真剣に側近の人事異動を考えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0790p/

漆黒の姫巫女、愛しの陛下

2011年6月19日17時10分発行